

会員の広場



コロナ禍に生きる

松井 和明（東京）

旅行、行事、飲み会、全てが消失し、GOTOトラベルから緊急事態宣言に反転、一年を過ぎるが、コロナは変異、感染者は急増、大都市では医療崩壊まで招来。待機中に急死する患者や印度の山積みする死者を燃やす姿など、逃げ場のない死への恐怖を意識させら

れた。非正規勤務の若者の雇止め、自殺者急増には、余裕はないが十万円の給付金を雇用NPOに寄付する。PCR検査、急ぎ実施中のワクチン接種とも先進国中最下位。そこで強行されるオリンピックは、昨今のTV番組の中では出色の娯楽となりそうである。

人付き合いは疎遠となり、僅かに、止む無く開始したスマホのラインによる子や孫との面談が人間を取り戻す機会となった。また、経済倶楽部の講演録画の土曜日の視聴は生活のリズムとなり、スカイプやズームによる月に三―四回のオンライン会合は連帯感を強める良き刺激となった。大学同期の会では、ビットコインや仏教の悟りを議論。寮の友人との読書会では、白人ナシヨナリズム、オスマ

ン帝国、「人新世」の資本論、などを採り上げた。NYタイムズの勉強会では、早くから武漢肺炎は蝙蝠起源で、生鮮市場の珍珠「センザンコウ」が人への感染を仲介したといわれた。コロナが、パンデミック化するかどうかは、病原体・宿主・環境の三角関係が先行き、どうなるかによる。注目は感染拡大力（基本再生関数）と致死率。病原体の変異、グローバル化の「人流」で感染拡大リスクは大きいと。また、米国では昨年末には二ワク

チンを完成させ、緊急承認。数万人の臨床試験で有効性九五%と実証されている旨。更には空中浮遊するエアロゾルが主感染ルート、脳・神経系にも影響が及ぶことなど、日本では専門家も明確に語らないコロナ情報に「情

報格差」を感じつつ、大いに啓発された。特にワクチンが今後を決めると注目された。

合間に、三密回避、検温と行き届いた映画館に通い話題作、鬼滅の刃、シャドウ・デイル、ノマドランド、などを見た。夜はアマゾン頼りの読書。「フレイル」なのか、痛む目や歯の医者通い。運動としての近隣の山の散策、在宅時は自己流の気功。この間、家事のプロと気づかされた同居人の命による掃除や飯炊き、といった日々。近隣では、感染リスクを感じることはなかったが、唯一、地方に住む息子の嫁さんが職場で濃厚接触者になり緊張したが、検査結果は陰性で済んだ。

幸い、ワクチン接種も終わり、感染予防効果を期待、行動範囲を広げるつもりでいる。